佐藤春夫著

殉情詩集

闇き給へ、われ今日人生の途なかばにして愛戀の小暗き森かげに到り、わが思ひは轉た落寞たり。わが胸は輞の下に碎かれたる薔薇の如く呻く、心中の事、眼中の涙、意中の人。兒女の情われに極まりては偶成の詩歌乃ちまた多少あり。げに事に依りてわが身には切なくもあるかな、わがこの歌。然れども既に世に問はん心なければ、わが息吹なるわが調べはいつしかに世の好尚と相去れるをいかにせん。われは古風なる笛をとり出でゝいま路のべに來り哀歌す。節古びて心をさなくたゞに笑止なるわが笛の音に慌しき行路の人いかで泣くべしやは。たとひわが目には水流るるとも、知らず、幾人かありて之に耳を假し、しばしそが歩みを停むるやいかに。……（自序の一節）

新潮社出版

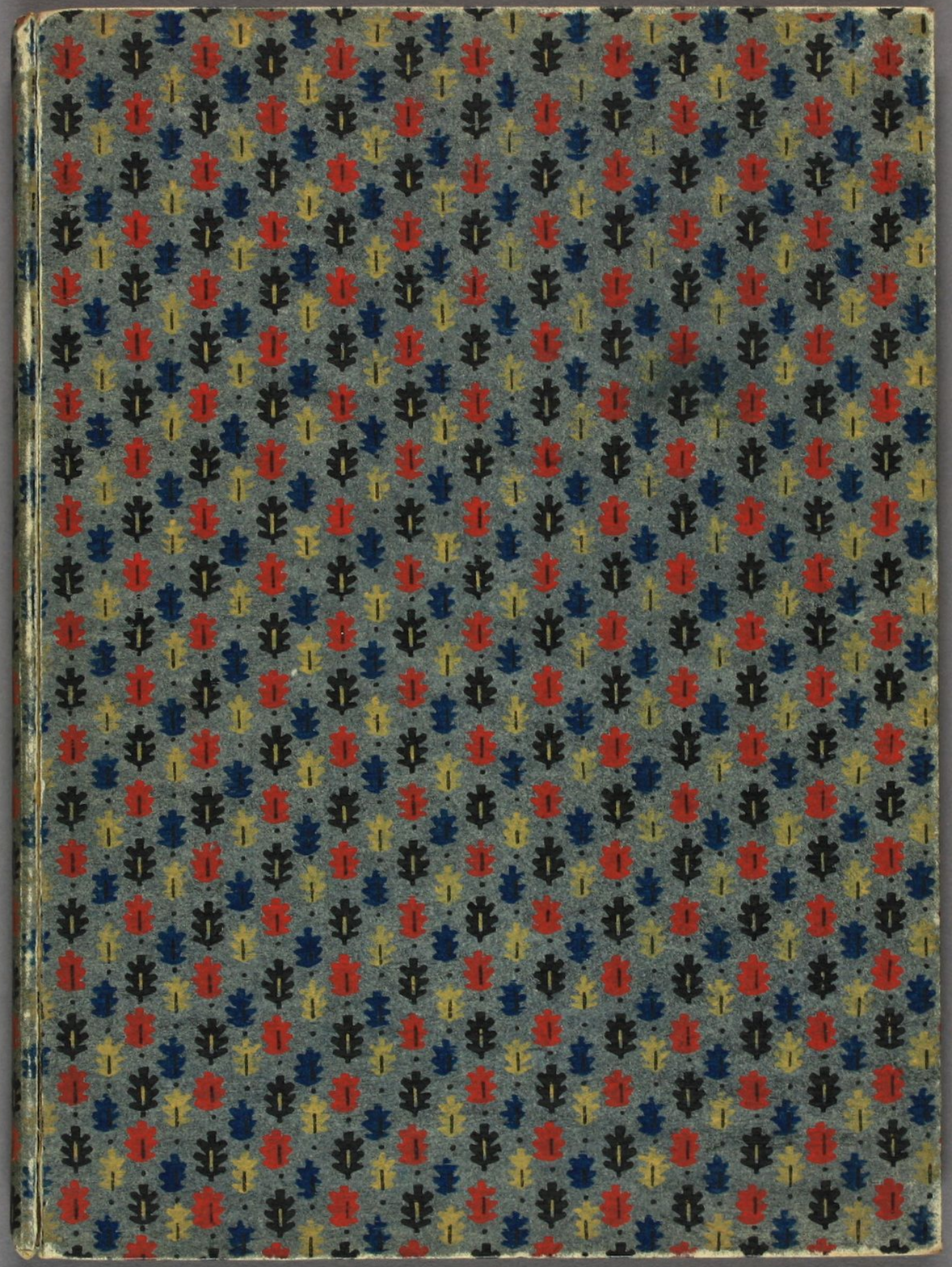
殉情詩集

佐藤春夫著

殉情詩集

人生の途なかばにして愛戀の小唄
聞き給へ、われ今日
き森かげに到り、わ
が思ひは轉た落寞たり。わが胸は
棚の下に碎かれたる薔薇の如く呻く、心中の事、眼中
の涙、意中の人。兒女の情われに極まりては偶成の詩
歌乃ちまた多少あり。げに事に依りてわが身には切な
くもあるかな、わが
この歌。然れども既に世に問はん
心なければ、わが息吹なるわが調べはいつしかに世の
好尚と相去れるをいかにせん。われは古風なる笛をと
り出でゝいまを路のべに來り哀歌す。節古びて心をさ
なくたゞに笑止なるわが笛の音に慌しき行路の人い
かで泣くべしやは。たとひわが目には水流るるとも、
知らず、幾人かありて之に耳を假し、しばしそが歩み
を停むるやいかに。……（自序の一節）

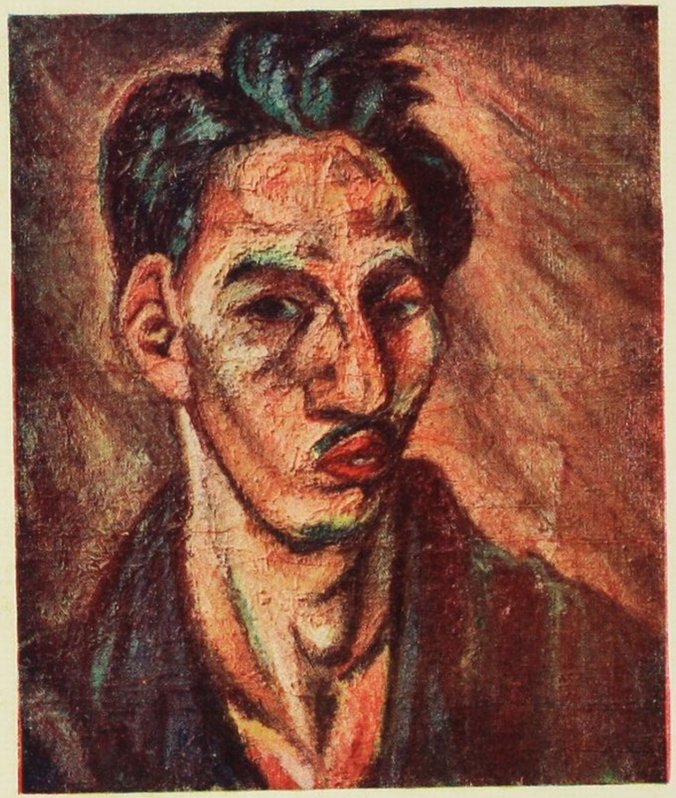
新潮社出版



殉情詩集

佐藤春夫著

一九二一年・東京・新潮社版



殉情詩集

佐藤春夫著

一九二一年・東京・新潮社版

殉情詩集自序

われ幼少より詩歌を愛誦し、自ら始めてこれが作を試みしは十六歳の時なりしと覺ゆ。いま早くも十五年の昔とはなれり。爾來、公にするを得たるわが試作おほよそ百章はありぬべし。その一半は抒情詩にして、一半は當時のわが一面を表はして社會問題に對する傾向詩なりき。今ことごとく散佚す。自らの記憶にあるものすら數へて僅に十指に足らず。然も些

の恨なし。寧ろこれを喜ぶ。後、志を詩歌に斷てりとには非ざりしも、われは無才にして且つは精進の念にさへ乏しく、自ら省みて深くこれを愧づるのあまり遂には人に示さずなりぬ。但、殉情の人は歌ふことにこそ纔に慰めはあれ、譬へば、かの病劇しき者の呻くことによりて僅にその病苦を洩すが如し。されば哀傷の到るものある毎にわれは恒に私に歌うて身をなぐさめぬ。又譬へば獵矢を負へる獸の森深く逃れ來りて、世を惡み人を厭ひて然も己が命を愛するの念はいや募り、己が口もて己が創痍を舐め癒さんと努むるが如し。

世には强記にして好事の士もあるものなり。面榮ゆくもわかかの試作を今更に語り出でて、時にはこれを編みて冊子とせよなど勸むる友さへあり。されど誰かは、未熟にして早く地に墜ちたる果實を拾ひて客の爲めに饗宴の卓上に盛らんや。乃ち篤くこれを謝するのみなりき。この機にのぞみてわれは改めてかかる人人に乞はん。わが舊き詩歌は悉くこれを忘れたまへ。少しく言葉を弄ばんか、今日のものとても同じく然したまへ。然らば今この集を敢て世に問ふの故は如何。曰く米鹽に代へんとす。曰く春服を求めんとす。否、われは口籠

ることなくして言ふべし。聽き給へ、われ今日人生の途なかばにして愛戀の小暗き森かげに到り、わが思ひは轉た落莫たり。わが胸は輞の下に碎かれたる薔薇の如く呻く。心中の事、眼中の涙、意中の人。兒女の情われに極まりては偶成の詩歌乃ちまた多少あり。げに事に依りてわが身には切なくもあるかな、わがこの歌。然れども既に世に問はん心なければ、わが息吹なるわが調べはいつしかに世の好尚と相去れるをいかにせん。われは古風なる笛をとり出でていま路のべに來り哀歌す。節古びて心をさなくただに笑止なるわが笛の音に慌しき行路の人いかで泣くべしやは。たとひわが目には水流るるとも、知らず、幾人かありて之に耳を假し、しばしそが歩みを停むるやいかに。

嗟吁、わが嗚咽は洩れて人の爲めに聞かれぬ。われは情痴の徒と呼ばるるとも今はた是非なし。

大正十年四月十三日

佐藤春夫

卷頭の三色版は著者の自畫像にして一九一五年の作に係り、二科會第二回展覽會に出品せるものなり。畫は既に破損せんとす。今掲げて著者自身が追憶の料たらしめんとす。看る人幸に深く咎めざれ。

目次

著者自畫像……卷頭挿畫
自序……一
同心草
水邊月夜の歌……三
また或るとき人に……五
或るとき人に……七
海邊の戀……九
斷章……一一

琴うた……一二
後の日に……一四
よきひとよ……一六
こころ通はざる日に……一八
なみだ……二〇
感傷肖像……二二
感傷風景……二四

晝の月

ためいき八章……二九
少年の日四章……三六

二つの小唄……三九
むかしのうた……四〇
晝の月……四二

心の廢墟

心の廢墟……四七
斷片……五一
わが溜息……五二
メフィストフェレス登場……五四
夜深くして歌へるわが歎きの歌……六一
聖地パレスチナ……六五

同心草

風花日將老
佳期猶渺渺
不結同心人
空結同心草

薛濤

水邊月夜の歌

せつなき戀をするゆゑに
月かげさむく身にぞ沁む。
もののあはれを知るゆゑに
水のひかりぞなげかるる。
身をうたかたとおもふとも
うたかたならじわが思ひ。

げにいやしかるわれながら
うれひは清し、君ゆゑに。

或るとき人に與へて

片こひの身にしあらねど
わが得しはただこころ妻
こころ妻こころにいだき
いねがてのわが冬の夜ぞ。
うつつよりはかなしうつつ
ゆめよりもおそろしき夢。

こころ妻ひとにだかせて
身も靈もをののきふるひ
冬の夜のわがひとり寢ぞ。

また或るとき人に與へて

しんじつふかき戀あらば
わかれのこころな忘れそ、
おつるなみだはただ祕めよ、
ほのかなるこそ吐息なれ、
數ならぬ身といふなかれ、
ひるはひるゆゑわするとも

ねざめの夜半におもへかし。

海邊の戀

こぼれ松葉をかきあつめ
をとめのごとき君なりき、
こぼれ松葉に火をはなち
わらべのごときわれなりき。
わらべとをとめよりそひぬ

ただたまゆらの火をかこみ、
うれしくふたり手をとりぬ
かひなきことをただ夢み、

入り日のなかに立つけぶり
ありやなしやとただほのか、
海べのこひのはかなさは
こぼれ松葉の火なりけむ。

斷章

さまよひくれば秋ぐさの
一つのこりて咲きにけり、
おもかげ見えてなつかしく
手折ればくるし、花ちりぬ。

琴うた

吹く風に消息をだにつてばやと思へどもよしなき
野べに落ちもこそすれ

梁塵祕抄

かくまでふかき戀慕とは
わが身ながらに知らざりき、
日をふるままにいやまさる
みれんを何にかよはせむ。

空ふくかぜにつてばやと
ふみ書きみれどかひなしや、
むかしのうたをさながらに
よしなき野べにおつるとぞ。

後の日に

つれなかりせばなか〳〵に
そらにわすれて過ぎなまし、
そもいくそたびしぼりけむ
たもとせつなしかのたもと。

せつなさわれにつもるとも

沾ぢてはかわくものなれば
昨日のたもとにこと問はむ
ぬるるやいかにけふもなほ。

よきひとよ

よきひとよ、はかなからずや
うつくしきなれが乳ぶさも
いとあまきそのくちびるも
手をとりて泣けるちかひも
わがけふのかかるなげきも
うつり香の明日はきえつつ

めぐりあふ後さへ知らず
よきひとよ、地上のものは
切なくもはかなからずや。

こころ通はざる日に

こころを人にさらせども
げにもとなげく人ぞなき、
こころのいたで血を噴けど
あなやと叫ぶ人ぞなき。
すまじきものは戀にして
苦しきものぞこころなる、

こころはいとし、すべもなし、
手にはとられず目には見られず。

なみだ

埋火もきゆや泪の烹る音　　芭蕉

あるはのきばゆたつけぶり、
あるは樋をゆくたにのみづ、
あるはわが目にわくなみだ。
これをさだめとさとるゆゑ、
ぜひなきものと知るらめど、

とめてとまらぬものなれば、
せつなやあはれほそぼそと、
ひとすぢにこそながるらし。

感傷肖像

摘めといふから
ばらをつんでわたしたら、
無心でそれをめちやめちやに
もぎくだいてゐる。
それで、おこつたら
おどろいた目を見ひらいて、

そのこなごなの花びらを
そつと私の手にのせた。
その目は涙ぐんで笑ひ
その口は笑つて頰は泣いてゐる。
表情の戸まよひした
このモナリザはまるで小娘だ。

感傷風景

あなたとわたしとは向ひあつて腰をかけ、
あなたはまぶしげに西の方の山をのぞみ、
わたしはうつとりと東の方の海をうかがひ、
然しふたりはにこにこして同じ思ひを樂しむ。
とありし日のとある家の明いバルコン。
何も知らない家の主人にはよき風景をほめ、

ふたりはちらちらとお互の目のなかを樂しむ。
戀人の目よそれはまあ何といふ美しい宇宙だらう。
全くあなたのその目ほどの眺めも花もどこにあらう……
おお、思ひ出すまい。ふたりは庭のコスモスより弱く、
幸福は卓上につと消えた鳥かげよりも淡く儚く、
歎きは永く心に建てられた。あの新築の山莊のやうに。

柔かきかかる日の光のなかに
いまひとたび、あはれ、いまひとたび
ほのかにも洩したまひね、
われを戀ふと。

北原白秋「斷草」二十五

晝の月

舊作のうち記憶に殘れるもの三四。別に「晝の月」及び讀み人を知らぬ古曲の一節を拾ひてここに採錄す。舊作は概れ數年前わが二十二三歳ごろの作なり。

ためいき

一

紀の國の五月なかばは
椎の木のくらき下かげ
うす濁るながれのほとり
野うばらの花のひとむれ
人知れず白くさくなり、

佇みてもものおもふ目に
小さなるなみだもろげの
素直なる花をし見れば
戀人のためいきを聞くこちするかな。

二

柳の芽はやはらかく吐息して
丈高くわかき梧桐はうれひたり
杉は暗くして消しがたき憂愁を祕め

椿の葉日の光にはげしくすすり泣く……

三

ふといづこよりともなく君が聲す
百合の花の匂ひのごとく君が聲す。

四

なげきつつ黄昏の山をのぼりき。
なげきつつ山に立ちにき。

なげきつつ山をくだりき。

五

蜜柑ばたけに來て見れば
か弱き枝の夏蜜柑
たのしげに
大なる實をささへたり。
われもささへん
たへがたき重き愁を

わが戀の實を。

六

ふるさとの柑子の山をあゆめども
癒えぬなげきは誰がたまひけむ。

七

遠く離れてまた得難き人を思ふ日にありて
われは心からなるまことの愛を學び得たり

そは求むるところなき愛なり
そは信ふかき少女の願ふことなき日も
聖母マリアの像の前に指を組む心なり。

八

死なんといふにあらねども
涙ながれてやみがたく
ひとり出て佇みぬ
海の明けがた海の暮れがた

——ただ青くとほきあたりは
たとふればふるき思ひ出
波よする近きなぎさは
けふの日のわれのこころぞ。

少年の日

1

野ゆき山ゆき海邊ゆき
眞ひるの丘べ花を敷き
つぶら瞳の君ゆゑに
うれひは青し空よりも。

2

影おほき林をたどり
夢ふかきみ瞳を戀ひ
あたたかき眞晝の丘べ
花を敷き、あはれ若き日。

3

君が瞳はつぶらにて
君が心は知りがたし。

君をはなれて唯ひとり
月夜の海に石を投ぐ。

4

君は夜な夜な毛糸編む
銀の編み棒に編む糸は
かぐろなる糸あかき糸
そのラムプ敷き誰がものぞ。

二つの小唄

男のうたへる

ひとりものかや二十日月、海の夜あけにのこりたる。

女のうたへる

かがみくもらすわがといき、夕べは月の暈となる。

むかし、いかなる人のいかなるをりにやのこし
たりけむ、かかる戀慕の祕曲ひとふしあり。

しんじつこひしきものならば、つまも子もあるものか、とも
おぼすらめども、おもへども、わりなさよえにしたたれず、
切なしやゆるさせたまへ、なわすれそ、互に、けふを。と、
なければぜひもなしや、しんじつこひしきものゆゑに血をなが
してもともおもへども、おもへども。あきらめてさても得わ

すれで、おもかげ。ゆめに見てゆめさめて、あなわが身、わ
が世、憂き世。

晝の月

野路の果、遠樹の上、
空澄みて晝の月かかる。

あざやかに且つは仄か
消ぬがに、しかも嚴か。

見かへればわが心の青空、
おお、初戀の記憶かかる。

心の廢墟

……

さるを今君ここにおはさず、
われは今空しくも
遠き君がこころに語を寄するのみ、
われにはや歌つくる力はあらず、
われわが爲めに口ずさめども
君の聞き給はぬ歌を如何でわれつくるを得んや！

……

ルネ・ヂオルジヤン「水邊悲歌」堀口大學譯

心の廢墟

その戀人の中にはこれを慰むるものひとりだに無く
その朋はこれに背きて仇となれり　耶利米亞哀歌

「主よ、わが心の爲めに
さまよへるシオンの娘を
遣しめよ。

「さまよへるシオンの娘よ、
わが心に來れ、
來りわが心の礎に坐して哭け。
「來り見よ、シオンの娘、
わが心は荒果てて
汝がふるさとの都のごとし。
「來り哭け、シオンの娘、

わが心の廢墟はいま
かがやけるみ空の月かげに濕ふ。」
かく歌へるわが歌により
シオンの娘ひとり來り
しばしわが心に坐して哭きぬ。
坐して哭けるシオンの娘は
されど、現世のものには非ず、

これはこれ影の影にして。

影は影なる聲によりて哭く、
わが心の廢墟より
いや深き寂寞を搖起して哭く。

斷片

われら土より出でたれば土にかへる
われら裸にて生れたれば裸にて生く。
げにもよ——
われらひとりにて產れたればひとりにて生く。
ひとりにて生きて、さてひとりにて死にゆく……

わが溜息

夜もすがら日もすがらわが長息けどもそも誰がため
と問ふ人もなし(?)

萬葉集

わが靈は陰府にくだる細き徑にして
わが溜息は陰府より洩るる風なれば
とほくかすかに通ひ來りてわが脣の上に消ゆ。
われはわれひとりしてわが溜息をもらし

その一息ごとに陰府の近さを測り知る。
人あり、これを感じこれを聞くとも
わが溜息をおもひやらずわが爲めに泣かず
ただ身ぶるひしてひたすらにこれを惡み怖る。
げにそは屍のにほひを帶びて暗く冷く
光達しがたき底よりもるる風なれば。

メフィストフェレス登場

海につづける城の櫓。

夜。

波の音きこゆ。

思ひ沈める騎士ひとり。

この時、メフィストフェレス登場。

「今晩は！

大そう陰氣なお顏をして

お淋しさうだ。

ちよつとお話相手をさせてください。

さて、一本氣な殿樣！

物語風の騎士！

君は近ごろ立派なお城を建てましたね、

噂を聞いて參上して見たが

見事！　見事！

それに思ひ出といふ貴女の

青ざめた亡霊によく奉仕して御座る。

感心！　感心！

ところで殿様。

お城は飛んだところへ建てましたなあ。

足場は大丈夫ですかい。

一たい私はその道のくらうとだが——

ちよつと御覧。

さて智恵のない地盤さね、

まるでこれや女ごころの沙濱だ。

そうれ！　風が吹けば沙丘

波が荒れれば洲……」

メフィスト双手をひろげて風と波との身ぶりよろしく濶歩す。

「……どうです。

僕がかうちよつと歩いただけでも、

何と！　少々は搖れませう。

これや一さう中空へ建てた方がましだつた。

なるほどお城は立派さね、

今さら立退くのは惜しいやうだ。

だが悪い事は言はない、
もういいかげんに立退いては！
それとも殿様！
お城の崩れる日を待つて
幽霊と心中なさるお心掛けですかい。
それもよからう、御隨意だ。
私は他人の意志は尊重しますからね。
おや、おや！
これやお氣に觸つたかな。

それではせいぜいおひとりでお泣きなさい。
たまにはしんみりひとりを知るのも身の爲めです。
さやうなら。
陰氣なところに長居は無用だ。
どうれ、ちよつと寄り道をして
あのしやれた一組を見て來ようか、
奴等は全くしやれて居るよ——
泣きながら脣を吸ひ合つて靈とやらの傷を甜あつてゐるのだ
からな……」

突然、騎士は立上り、長劍を拔きてメフィストを刺さんとす。

この時櫓はおもむろに少しづつ傾く事。

騎士は聲を上げて呻く。

見えざるところよりメフィストの哄笑聞ゆ。

騎士はよろめき倒れんとして僅に劍によりて身を支ふ。

夜深くして歌へるわが歎きの歌

燈暗無人説斷腸　陸放翁

……わが歎きは終にわがものなれば
人、これをかへり見ず。
又かへり見ることを我は許さず、
ヨブの友よ來りてヨブを慰めざれ。
わが歎きよ、おおわがものよ、

われは限りなくなんぢを愛す、
彼等が妻になすがごとく
また彼の女らが幼子になすがごとく。
わが歎きよ、ただ一つなるわがものよ、
われは、妻なく幼子なきわれは
夜もすがら強くなんぢをかき抱きて
なんぢがうへにわが涙を盡す。
おおわが歎きよ、わがひとり子よ
なんぢが母はわが戀にして

なんぢが母はなんぢを遺して早く去りぬ。
なんぢよ、なんぢは面かげ母に似てかなし、
わが歎きよ。なんぢ生ひ育て。
永く生きよ。息絶ゆること勿れ。
われをして永く具になんぢを愛し
なんぢに依りてなんぢの母が面かげを忍ばしめよ。
われは今、母なきなんぢをかく強く抱く。
夜ふかし、見ずやわが子、
なんぢが母の亡靈は今宵もまた來りて

われとなんぢとの傍にやさしくも添寝したり……

聖地パレスチナ

聖地パレスチナは何時までも聖地なり。
たとひ異端の寺立ち並び、異端の都となり
異端の弓櫓の上に異端の星集ひ耀き
パレスチナの水は異端の噴井よりふき溢れ
異端の徒は異端の怪しき花を蒔き
パレスチナの土は異端の種を培ひて

荊ある異端の花を花ざかりにするとも、
歎く勿れ、そのかみの聖地、今日の聖地、後の日の聖地、
一たびまことの聖地なりしバレスチナ
吾がバレスチナぞ何時までも吾が聖地なる。

殉情詩集　畢

大正十年七月七日印刷
大正十年七月十二日發行

（定價金九拾錢）

◀殉情詩集▶

著作者　佐藤春夫

發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話番町（八〇九番　八九九三六番）

印刷所　東京市小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社
電話小石川五九二番

印刷者　佐々木俊一

振替（東京）一七四二番

佐藤春夫氏著

■田園の憂鬱（第五版）

定價壹圓五拾錢、送料拾錢

■お絹とその兄弟（十二版）

定價五拾錢、送料六錢

◇新潮社出版◇